

# 視点

## 幼児教育・保育は社会から評価されているのか

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

理事 黒田秀樹



園のあるベテランの先生が不満気な様子で話します。園の仕事が終わって帰宅した時、先に帰っていた夫に思わず「あー疲れた」と言うと「子どもと遊んで何が疲れるんだ」と言われたということです。「ただ、遊んでいるわけではないし、そもそも、子どもと遊ぶことがどんなに神経を使い、どんなに体力を使うことなのか、全く夫は理解していないんですよ」と話は続けます。

このエピソードは、その先生の夫婦間の特別な話ではないように思います。幼児教育・保育という仕事が、どのような仕事なのか社会一般の理解は決して的確なものではないと感じています。

ずっと以前のことですが、小学校の先生方と幼小合同の研修会をおこなった時のことです。幼稚園の教育課程の紹介をした折、小学校の先生から「幼稚園にも教育課程があるんですね、驚きました」と感想が出たことには私の方が驚きました。幼稚園では計画もないし、実践のチェックやそこに繰り広げられた幼児教育・保育を省みる機会もない仕事だと、これまで思っていたのだということを知ったからです。

最近になって、以前より幼児教育・保育の理解は進んでいるのだろうかと気になって、あらためて探ってみると「社会的評価」という言葉によく出会っています。「社会的評価」とは、どのようなことなのか考えてしまいます。何を基準とした評価なのでしょう。

例えば、OECDの統計データを見ると就学前教育機関に対する公的支出の対GDP比は、日本は世界の先進諸国と比べてみるとびっくりするほど低いことが分かります。つまり、国の予算配分を指標と

して「社会的評価」を捉えると確かに高い評価がなされているとは言えません。しかし、一方で、幼児教育・保育の無償化が令和元年10月からスタートし、保護者に対して大きな経済的支援となっています。無償化が実現したことは国が幼児教育・保育の重要性を認識している証と捉えることもできます。また、昨年からのコロナ禍の中、比較的多くの自治体から幼稚園やこども園、保育園の保育従事者への慰労金が支給され、最近ではワクチン接種について保育従事者の優先接種が進められている向きもあります。このような状況は、社会一般の方々にも好意的に捉えられており、幼児教育・保育の「社会的評価」は徐々に高まっているように見えます。

しかし、ここで考えなくてはならない要點があるように感じています。「社会的評価」は何に対する評価なのか、評価の基準は何なのかということです。確かに、エッセンシャルワーカー（生活を営むためになくてはならない仕事）としての社会的評価は高まっているように思いますが、それは大人の状況や生活を回していく仕事としての評価だと思えてならないのです。子どもの発達や成長を育むという本来の「責務」が評価されているとは伝わってこないのです。

社会的評価が幼児教育・保育そのものに目が向けられることがないと幼児教育・保育の「質」の向上が担保されることもありません。さらに、社会の幼児教育・保育の「質」を測る基準がどのようなものであるのかも気になるところです。いつも子どもの側に立った社会的評価がなされるために私たちの発信が必要です。